

現代青年の自己受容に関する分析的研究 (3)

－自我状態との関係についての男女比較－

菱 田 陽 子

An Analytical Study on Recent Adolescents' Self-Acceptance (3)

－ Research in Sex Difference Related to Ego State －

Yoko HISHIDA

青年の自己受容については、様々な研究がなされているが、完全な自己受容の持続する生き方は考えにくい。とすれば、完全な自己受容の解明も考えにくい。しかしながら、社会に適応しながら生きて生き抜くことが、人に課せられた課題であるとすれば、自己受容の検討は、生きやすい生き方の究明の重要な側面の一つと考えられる。

青年の自己受容を考えた場合、複雑な現代社会の環境に青年期の自己受容は安定せず、社会に適応しにくい問題点が見受けられる。社会を震撼させるような凶悪な事件を起こす青年の犯罪動機には、何が大切なのか判断できない未成熟な幼稚性を感じるとともに、様々な鬱積した未解決な怒りが心を占めているようにも思われる。おとなしく、普通の青年であった、というコメントをよくみかけるが、外見では想像できない、葛藤と不適応を抱えながら生きている青年の辛さが予測されると共に、その辛さを把握して適切に悩み考える力が養われていないことも想像される。

青年期のアイデンティティの課題に関する確立と拡散が、悩みながらも適応の範囲内であれば、ありのままの自分をなんとか受け入れながら、問題を起こすまでの不適応にいたらずに過ごすことができると思われるが、近年の犯罪を起こす青年には、不適応を受け入れる心が養われていないようにも見受けられる。自己の受け入れは、自己の承認でもあると考えられるが、弱さや脆さを承認することが甘えや依存とどのように関わるかも気になるところである。

このような観点からも、自己受容は、アイデンティティを含む青年の意識構造と大きく関わっていると考えられ、現代青年の意識構造に関する先の研究(金子 2003, 金子 2004, 金子・菱田 2005)を参考に、自我状態との関わりから検討したい。

現代青年の自己受容に関しては、先に、優しさ・真面目さを中心に性差を含め、検討してきた(菱田・金子 2002, 菱田 2003, 菱田 2004)。更に、女子青年の自己受容を、自己受容と自我状態も含めて、多角的に分析し検討した(金子・菱田 2005)。その結果によれば、女子青年の自己受容と自我状態の関係では、自由な子ども(FC)と関連を示したのは、「やさしさ・まじめ

菱 田 陽 子

さ」受容のみであった。このことは、自分の優しさ、真面目さを受容している者は、喜びに満ちた自我状態にあることを示唆している。ありのままの自分の受容には、喜びに満ちた自由な子ども (FC) のエネルギーを中心として使うことが望ましく、それによって安定し、持続性のある自己受容が実現すると考えられるが、この研究結果より、女子青年の安定した喜びのある自己受容の根幹には「やさしさ・まじめさ」受容のあることが検証されたと言える。ただし、様々な環境・状況の変化に (FC) の関与のみで対応していると考えすることは不可能とも思われ、5つの自我状態のそれぞれのエネルギーを環境・状況に合わせて使い分けていることも予想されることから、更なる検証が必要と思われる。

以上のように、女子青年の自己受容と自我状態の関係で、「やさしさ・まじめさ」受容と自我状態の関わりを検証したが、性差についての検証に至らなかったため、本研究では、男子青年の自己受容と自我状態を分析し、先の研究 (金子・菱田 2005) と合わせて男女比較を行いたいと考えた。

自己受容の男女比較については、先に、自己受容の構造と、自己受容を支える特性と自己受容、の関係をみている (菱田 2003)。この結果によれば、自己受容の構造にもそれを支える特性にも類似点はあるものの性差が認められた。自己受容を支える根幹として、優しさ、真面目さの関与が大きいと考えられるが、この結果では、男性は優しさと真面目さが分化せず、女性では分化が認められた。このことにより、男性の「まじめなやさしさ」は構造が複雑であることが予測され、女性の「やさしさ」受容は、メタ的な特性と健全な依存性に由来することが予測された。更に、男性は自立性の発達にともない「まじめなやさしさ」を獲得し、女性は自分の厳しい体験によって他人に対する「やさしさ」を身につける傾向が推測された。

これら先の研究より、自己受容と真面目さ・優しさの関与に注目してきたが、本研究では、自我状態に注目し、優しさ・真面目さを含む自己受容側面と自我状態が示す心のエネルギーとの関連から男女比較を含めて検証したい。自我状態については、Eric Berne の Transactional Analysis (交流分析) の理論を用いて構築する。

目 的

本研究では、青年が、自己受容に関して、形に表れにくい自我状態のどのエネルギーを使っているのかを分析すると共に、その性差を検証する。特に、優しさ、真面目さの受容と自我状態の「自由な子ども (FC)」に注目したい。青年期にありのままの自分の受け容れがいつも安定して実現しているとは考えにくいと共に、特にこの時期においてはアイデンティティ、自立性の発達などの側面からも自己受容の揺れが想像される。優しさ、真面目さ以外の受容側面と自我状態の関わりも単純ではないことも予測されるが、先の女子青年の分析 (金子・菱田 2005) を参考に男子青年を分析する。自己受容と自我状態の因果関係を見るため、本研究では、共分散構造分析を試みた。この分析により、女子青年と男子青年各々の自己受容と自我状態の複雑な関係の解明が期待できる。

具体的には、金子 (2004) データを再分析する了承を得たので、金子・菱田 (2005, 金子 2004 データを分析) を参照しつつ、性差の検討をも加えることとする。本研究における具体的目的は、

下記の通りである。

- (1) これまでに使用した沢崎 (1993) による自己受容尺度、並びに、菱田が独自に作成した自己受容尺度の中で自己への愛しさを中心とした尺度に対する反応を分析し、それぞれの因子構造を男女別に明らかにする。これは、これまでの筆者の分析に関する、異なる標本による確認でもある。
- (2) 杉田 (1990) エゴグラムにより、予め決められている計算法をもとに尺度得点を求め、自己受容に関する沢崎尺度・菱田尺度それぞれの因子得点との間の因果関係を男女別に解明する。

方 法

調査対象：国立大学生 176 名 (男 62 名, 女 114 名), 平均年齢 18.8 歳 (殆ど (84.0%) が 18 及び 19 歳, 最高 25 歳)。調査は複数回にわたって行ったため, すべてに回答したものは 129 名 (男 42, 女 87 名), また一部記入漏れのため, 項目により有効回答数に変動がある。

調査時期：2003 年 6 ～ 7 月

使用調査用紙：実際に得られたデータのうち, ここで分析の対象となったものは次の通りである。

- ①自己受容尺度として, 沢崎 (1993) による 35 項目及び菱田 (2003) の一部を変更したものの 24 項目, ②エゴグラム (杉田 1990) 50 項目, 以下これらをそれぞれ, 自己受容に関する「沢崎尺度」, 「菱田尺度」及び「エゴグラム」と呼ぶことにする。

これらの尺度に関する測度としては, 予め定められている計算法によって求めることを原則としたが, 一部, 沢崎尺度, 菱田尺度については, ここで実施した因子分析による因子得点によった。

調査手続き：大学の講義室において, 質問紙を配布し, 回答されたものをその場で回収したものである。

結果と考察

1. 自己受容尺度の因子構造

ここで使用した尺度による自己受容の因子構造を男女別に明らかにするために因子分析を行った (主因子法, Varimax 回転)。その際, いずれの因子の因子負荷量も極端に低い項目 (因子負荷量の絶対値が, .300 未満) を除いて分析した。以下の因子分析に於いても同様の手続きによっている。

(1) 沢崎尺度による男女別自己受容因子構造

沢崎尺度は, 様々な自己受容側面の受容程度について気になるか, 気にならないかで尋ねている。気にならなければ受容していると考え, 気になれば受容していないと考える。男女とも 6 因子解を得たが因子構造に違いが認められた。

女子の因子構造は, Table1 に見られるように, 第Ⅰ因子は「社会性受容」因子, 第Ⅱ因子は「外見受容」因子, 第Ⅲ因子は「やさしさ・まじめさ受容」因子, 第Ⅳ因子は「生き方受容」因子, 第Ⅴ因子は「自分の状態受容 (居場所受容)」因子, 第Ⅵ因子は「安定性受容」因子と考えることにする。

菱 田 陽 子

Table1 沢崎自己受容尺度の因子構造 (女子)

項 目		I	II	III	IV	V	VI	h^2
社会性	21 積極性	.729	.004	.099	.093	-.181	.151	.606
	25 指導力	.719	.101	.085	.066	.086	.112	.558
	30 やる気	.611	.125	.157	.158	.186	-.002	.473
	29 責任感	.567	.109	.326	.106	.174	.180	.514
	22 協調性	.473	.182	.344	-.034	.000	.429	.560
	15 人間関係	.469	.044	.010	.296	.024	.411	.479
	20 明るさ	.433	.131	.179	.236	-.183	.396	.483
	31 男または女としての自分	.432	.316	.328	.217	.124	-.029	.458
	34 過去の自分	.394	.162	.208	.280	.135	-.027	.321
外見	5 顔立ち	.236	.778	.240	-.070	.163	-.131	.768
	6 体つき	-.082	.693	.053	.289	.156	.141	.617
	3 体力	.041	.559	.020	.011	-.014	.289	.399
	12 性的能力(魅力)	.267	.525	.011	.320	.037	-.042	.453
	9 服装	.002	.431	.301	.337	.050	.164	.419
	8 運動能力	.199	.372	.019	.038	-.030	.112	.193
	4 健康状態	.057	.293	.078	.269	.151	.168	.219
やさしさ・まじめさ	28 思いやり	.207	-.031	.799	.103	.038	.198	.734
	18 やさしさ	.142	.110	.792	.303	-.104	.069	.767
	19 まじめさ	.107	.056	.498	.239	.071	.002	.325
	7 知性(学力)	.294	.202	.348	-.076	.068	-.234	.313
	24 忍耐力	.148	.154	.288	.120	.201	.255	.248
生き方	16 生き方	.475	.091	.115	.562	.083	.230	.624
	17 社会的地位(立場)	.105	.081	.156	.502	.177	.086	.332
	2 性別	.085	.140	.142	.468	.035	.047	.270
	10 職業	.158	.008	.062	.464	.322	.064	.352
	35 現在の自分	.405	.250	.109	.459	.106	.262	.530
(自分の状態 居場所)	13 家族	-.089	-.082	-.019	.199	.666	-.042	.500
	14 住居	.067	.016	.083	.241	.598	.080	.434
	33 きょうだいの 一員としての自分	.103	.060	.310	-.106	.563	.186	.473
	11 経済状態	-.028	.211	-.087	.222	.502	.150	.377
	32 親に対する子 どもとしての自分	.169	.260	.374	-.075	.386	.186	.425
	1 年齢	.168	.188	-.053	.000	.275	-.001	.142
安定性	23 情緒安定性	.027	.258	.116	.022	.213	.593	.478
	27 決断力	.291	.116	-.044	.124	.057	.426	.300
	26 のんきさ	.098	-.004	.135	.245	.174	.382	.264
Σa^2		3.685	2.716	2.686	2.330	2.141	1.849	15.407
%		10.5	7.8	7.7	6.7	6.1	5.3	44.0

男子の因子構造は、Table2に見られるように、第Ⅰ因子は「自分の状態受容」因子、第Ⅱ因子は「忍耐と安定受容(無理受容)」因子、第Ⅲ因子は「社会性受容」因子、第Ⅳ因子は「まじめさ・やさしさ受容」因子、第Ⅴ因子は「外見受容」因子、第Ⅵ因子は「居場所受容」因子と考えることにする。

現代青年の自己受容に関する分析的研究 (3)

Table2 沢崎自己受容尺度因子構造 (男子)

項 目		I	II	III	IV	V	VI	h^2
自 分 の 状 態	31 男または女としての自分	.659	.081	.142	.022	.053	.165	.492
	7 知性 (学力)	.646	.372	.055	.153	-.077	-.095	.597
	35 現在の自分	.612	-.065	.334	.259	.311	.081	.661
	26 のんきさ	.524	.041	.071	-.029	.164	-.234	.364
	8 運動能力	.509	.285	.191	.032	.278	-.288	.538
	13 家族	.498	.091	.065	.264	-.122	.308	.440
	2 性別	.417	.056	.040	.070	-.043	.099	.195
	17 社会的地位 (立場)	.408	.117	.393	-.136	-.149	.179	.407
	12 性的能力 (魅力)	.393	.362	.150	.119	.043	-.045	.326
(無 理 と 安 定)	24 忍耐力	-.080	.618	-.176	.328	.151	.047	.552
	32 親に対する子どもとしての自分	.083	.595	.047	-.234	.009	-.053	.420
	16 生き方	.546	.585	.080	-.060	-.116	-.070	.669
	33 きょうだいの一員としての自分	.077	.543	.035	.255	.117	.177	.412
	34 過去の自分	.269	.524	.320	-.131	.184	.060	.505
	23 情緒安定性	.262	.511	.111	.058	-.037	-.293	.433
	11 経済状態	.156	.405	.351	-.116	.072	.230	.383
社 会 性	21 積極性	.157	.123	.891	.170	-.142	.025	.883
	20 明るさ	.503	-.053	.543	-.005	-.101	-.242	.619
	15 人間関係	.228	.136	.470	-.083	-.007	.111	.310
	27 決断力	.002	-.092	.439	-.040	-.001	.018	.203
	9 服装	.380	.052	.437	-.226	.267	.129	.477
	30 やる気	.067	.239	.408	.332	.059	.026	.342
	25 指導力	-.017	.219	.397	.327	.066	-.080	.323
	22 協調性	.244	.368	.375	.325	-.118	-.346	.575
や ま じ し め さ	28 思いやり	.181	.032	-.090	.746	.013	-.114	.611
	29 責任感	.208	-.113	.240	.622	.174	-.188	.566
	10 職業	.216	-.008	.020	.538	.245	.185	.431
	18 やさしさ	.059	.462	.046	.536	-.116	-.441	.714
	19 まじめさ	-.173	.024	-.115	.469	-.061	.145	.288
外 見	6 体つき	-.083	.357	-.061	.196	.808	.256	.895
	4 健康状態	.018	-.126	-.066	-.046	.636	-.122	.442
	5 顔立ち	.446	.296	-.011	.094	.505	.233	.605
	3 体力	.006	.210	.084	.310	.457	-.345	.475
居 所 場 所	14 住居	.052	.140	.351	-.111	.068	.623	.551
	1 年齢	.255	-.084	.023	.296	-.075	.459	.376
Σa^2		3.955	3.280	3.018	2.861	2.103	1.868	17.084
%		11.3	9.4	8.6	8.2	6.0	5.3	48.8

菱 田 陽 子

(2) 菱田尺度による男女別自己受容因子構造

菱田尺度は、沢崎尺度とは異なり、具体的に受容傾向を表現する項目を準備し、当てはまる程度を尋ねている。自分に対する評価や自分自身について考えることを中心とした項目を内容としている。男女とも3因子構造であると考えられほぼ同じ構造を示した。第Ⅰ因子は「自分好き(弱点大切)」因子、第Ⅱ因子は「自己愛しさ」因子、第Ⅲ因子は「自分尊重」因子と考えることにする。

Table3 菱田自己受容尺度の因子構造(女子)

項 目	I	II	III	h^2
7 私の中の弱点も、見方を変えれば良い面でもあると思う	.589	.115	.082	.367
8 私には、とても気に入っているところがある	.577	.311	.155	.454
2 自分の個性が好きだ	.572	.026	.335	.440
18 自分の弱点も自分なので、その弱点も大切だと思う	.536	.111	.118	.313
23 私の中にある弱点にも、人間としての意味があると思う	.492	.019	.106	.254
12 だれに反論されても揺るがない、自分の考えをもっている	.488	-.104	-.036	.250
9 自分にふさわしい役割があると思う	.457	.098	.089	.226
17 周りの人々は、私の才能を認めてくれる	.399	.051	.259	.229
13 悩んでいるときの自分の姿も好きだ	.370	.032	.207	.181
15 自分の弱さは、人の弱さを理解するのに役立つと思う	.369	.056	-.170	.168
5 自分の長所がよく分からない	-.307	-.111	-.237	.163
自己好き				
21 自分に優しい気持ちになることがある	.063	.818	.078	.679
22 自分をほめてやりたいと思うことがある	.247	.797	.093	.705
20 自分の身体と心をいたわる気持ちをもっている	.159	.581	.403	.525
24 自分を、いたわりたいと思うことがある	.050	.568	-.106	.337
自己愛しさ				
14 私は生まれて来なかったほうが良かったと思うことがある	-.058	-.074	-.690	.485
4 自分を嫌いではない	.365	.254	.658	.631
19 自分が生まれてきたことに感謝したい	.169	.341	.518	.413
6 周りの人をうちやまいしと思うことが多い	-.105	.323	-.406	.280
16 自分の弱さを、何とかしてなくしたい	-.145	.173	-.317	.151
自分尊重				
Σa^2	2.799	2.449	2.003	7.251
%	14.0	12.2	10.0	36.3

Table4 菱田自己受容尺度の因子構造(男子)

項 目	I	II	III	h^2
9 自分にふさわしい役割があると思う	.759	.174	-.025	.607
18 自分の弱点も自分なので、その弱点も大切だと思う	.736	-.245	.257	.667
23 私の中にある弱点にも、人間としての意味があると思う	.724	-.154	.115	.560
8 私には、とても気に入っているところがある	.688	.160	.093	.507
7 私の中の弱点も、見方を変えれば良い面でもあると思う	.601	-.074	.358	.495
2 自分の個性が好きだ	.567	-.164	.242	.406
12 だれに反論されても揺るがない、自分の考えをもっている	.469	-.315	-.467	.537
16 自分の弱さを、何とかしてなくしたい	-.463	.294	-.052	.303
5 自分の長所がよく分からない	-.437	-.205	-.108	.245
3 自分の考え方や行動のしかたがよく分かっている	.378	.126	-.028	.159
15 自分の弱さは、人の弱さを理解するのに役立つと思う	.349	-.016	.001	.122
自己好き(弱点大切)				
21 自分に優しい気持ちになることがある	.232	.689	.507	.785
22 自分をほめてやりたいと思うことがある	.346	.592	.209	.513
24 自分を、いたわりたいと思うことがある	.433	.591	.142	.558
6 周りの人をうちやまいしと思うことが多い	-.130	.489	-.224	.306
1 私はあまり大きな失敗をしない	.250	-.438	.163	.281
10 他人よりも優(すぐ)れていることが、何よりも大切だ	-.025	.341	-.133	.135
自己愛しさ				
20 自分の身体と心をいたわる気持ちをもっている	-.169	.156	.639	.462
17 周りの人々は、私の才能を認めてくれる	.070	-.089	.494	.257
13 悩んでいるときの自分の姿も好きだ	.234	-.273	.437	.320
4 自分を嫌いではない	.107	-.063	.431	.201
19 自分が生まれてきたことに感謝したい	.213	-.054	.339	.164
自分尊重				
Σa^2	4.271	2.251	2.068	8.590
%	19.4	10.2	9.4	39.0

2. 自己受容とエゴグラム(自我状態)の因果関係及び男女比較

自己受容の各因子得点と、エゴグラムの尺度得点をもとに、自我状態から自己受容への総体的な因果関係をみることを目指し、重回帰モデルの共分散構造分析を行った。各自我状態を外生変数、各自己受容因子を内生変数としてパス図に表し、分析した。以下、沢崎による自己受容及び菱田による自己受容について、男女別に分析を試みている。

パスはいずれも 10%水準で有意であり、適合度は、NFI, RFE, TLI, CFI, 及び RMSEA をもとにした。

以上の分析結果より、エゴグラムが示す男女の自我状態と自己受容の因果関係に違いがあり、女子のほうにより多くの関わりが認められた。

(1) 女子青年の沢崎による自己受容とエゴグラム(自我状態)の因果関係

Figure1 は、女子について沢崎自己受容の各因子と自我状態との因果関係モデルを示したものである ($\chi^2 = 13.467$ (df=26, $p=.979$), NFI=.859, RFE=.701, TLI=1.660, CFI=1.000 及び RMSEA=.000)。

以下の図において、長方形は顕在変数(観測変数)を示し、楕円は潜在変数を示し、各潜在変数にはそれぞれいくつかの質問項目が関わっているが、これらの図においては省略している。また、自我状態間の相関については 5%水準で有意なもののみを示している。

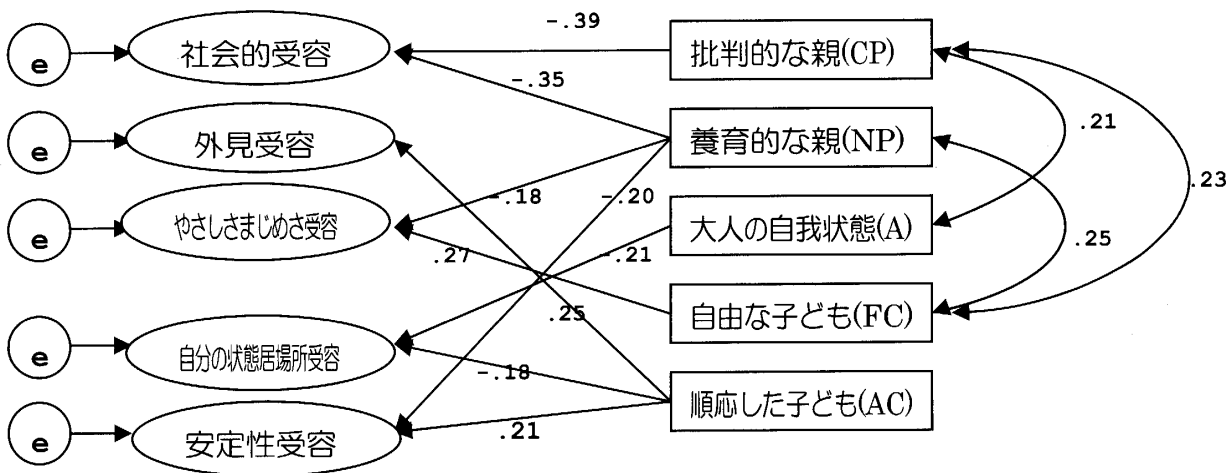


Figure1 沢崎自己受容因子とエゴグラムの因果関係(女子)

女子については、自分の生き方、社会的地位(立場)、職業及び現在の自分などを内容とする「生き方」受容では、何ら関連が見られなかった。これを除いた全ての自己受容因子は、上図 Figure1 に示されているように自我状態の何らかのものと関連が見られる。言い換えれば、何らかの自我状態がこれらの受容のために使われていることが示唆された。

筆者は、先の研究(金子・菱田 2005)等でエゴグラムの「自由な子ども(FC)」と自己受容の関わり方に注目してきた。「自由な子ども(FC)」は、「親の影響をまったく受けていない、生ま

れながらの部分である。ホメオスターシスの原理に基づいた自然随順の営みで、快感を求めて天真爛漫に振る舞う。直観的な感覚や創造性の源で、豊かな表現力は周囲に温かさ、明るさをあたえる」(末松弘行 1989)とされ、ありのままの自分の受け入れは、この「自由な子ども (FC)」のエネルギーによる受容が根幹と考えてきた。女子の場合、自我状態「自由な子ども (FC)」による受け入れは、「やさしさ・まじめさ」受容一つのみである。(FC) による受け容れは、感覚的にも喜びを感じて受容することを示しており、女子は、自我状態「自由な子ども (FC)」のエネルギーを使って「やさしさ・まじめさ」を受容していることが自己受容の根幹となり、全体的なトータルとしてのありのままの自己受容の実現に向かっていると考えられる。Figure1 が示すように、「自由な子ども (FC)」と「やさしさ・まじめさ」受容のパス係数は .27 と大きくはないが、「自由な子ども (FC)」とプラスに関わっていることに注目したい。「やさしさ・まじめさ」受容には「養育的な親 (NP)」の関わりもみられるが、この関わりはマイナスであり、パス係数は -.18 とその絶対値は小さい。

先に述べたように、男子に比べ、両者の関わり方は圧倒的に多く、ここで得られた有意な9つのパス係数の中で、プラスの関わりは3つ、マイナスは6つである。プラスのパス係数は、.21 ~ .27 と大きくはない。絶対値の比較的大きいパス係数は、「批判的な親 (CP)」と「社会性」受容 -.39 及び、「養育的な親 (NP)」と「社会性」受容 -.35 であり、両方とも社会性の受容との関わりである。女子の、積極性、指導力、やる気、責任感、人間関係などからなる「社会性の」受容は、批判的であるほど、養育的で親身な気持を使うほど受け容れられないことを示唆している。人間関係を保つ「社会性」受容は「親の自我状態 (P)」、「大人の自我状態 (A)」とプラスに関わることも予想されたが、実際には両方の親の自我状態ともマイナスに関わり、大人の自我状態とは意味のある関係が認められなかった。このように予想された関与がみられないということは、青年期の女子では、社会性受容に、「大人の自我状態 (A)」を使うまでには、精神的に成熟・発達していないとも考えられる。親の自我状態とのマイナスの関係については、(CP) は父親的親、(NP) は母親的親であることから、他人に対する世話に対して使われる自我状態と考えられる。社会の中で他の人の世話をすればするほど、又、こうあるべきであると規範を用いれば用いるほど、疲れてしまい、自分の社会性を受け容れられなくなるとも考えられる。女子の「大人の自我状態 (A)」は、家族、住居、経済状態、親に対する子どもとしての自分などを内容とする「自分の状態 (居場所)」受容とのみマイナスに関わっている。「事実に基づいて物事を判断しようとする大人の自我状態 (A)」が強いほど、自分の居場所を受け容れることができないことを示している。様々なことに要求、不満が多いと想像される青年期の女子は、自分の居場所に対しても批判的になり、メタ的に考えるほど自分の居場所、自分の今の状況を受け容れられず、あるがままの受け容れにいたっていないことも推測される。成熟性と関わりがあるメタを含んだ「大人の自我状態 (A)」と各受容因子とプラスの関わりが無かったことにより、女子青年の自己受容には、人間的成熟性は認められないことも示唆された。「安定性」受容には、「養育的な親 (NP)」と「順応した子ども (AC)」それぞれ、パス係数 -.20, .20 で関わっている。子どもを産み育てる女性の母性ともつながる「養育的な親 (NP)」の気持を使って、情緒安定を受容していることが推測されたが、反対の結果となった。この傾向は青年期の女子には、母性が未熟であるとも考えられる。女子の安

定性は、自我状態の中でも、反抗や怒りを含み、「人生早期に周囲の人たち（特に母親）の愛情を失わないために、子どもなりに身につけた处世術」（末松弘行 1989）とされる複雑な心の状態の「順応した子ども（AC）」を使うことで、相手に配慮しながら安定性が保たれていることが窺われる。社会や家庭の中でも、反抗を含みながらも、周囲の期待に沿いながら、従う立場になることも多い女子の特徴とも考えられる。安定性受容の中には、情緒安定性受容とともに、決断力、協調性、人間関係、明るさ等の受容も含まれ、自分に対するやさしさだけでなく性格的強さも必要とすると思われる。優しい母性は安定性受容をむしろ妨げ、不満を感じながらも順応しているように振る舞っていることが安定性を感じさせるのかも知れない。

(2) 男子青年の沢崎による自己受容とエゴグラム（自我状態）の因果関係

Figure2 は、男子について沢崎自己受容の各因子と自我状態との因果関係モデルを示したものである（ $\chi^2=10.209$ (df=14, $P=.747$), NFI=.747, RFE=.493, TLI=1.617, CFI=1.000, 及び RMSEA=.000）。

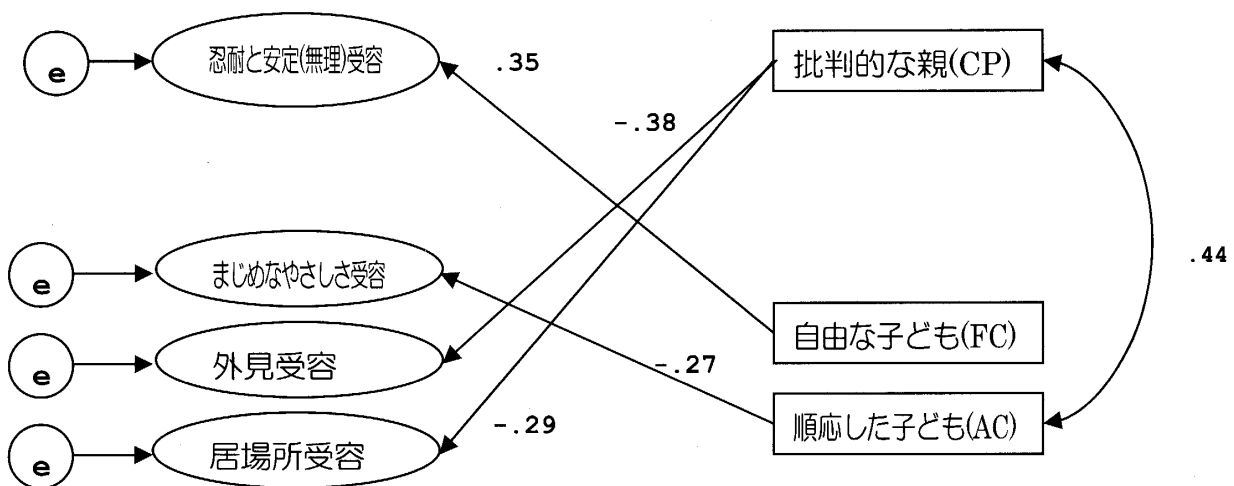


Figure2 沢崎自己受容因子とエゴグラムの因果関係（男子）

女子に比べ、男子における自己受容と自我状態の因果関係で有意になったものはとても少なく、その数は半分以下である。この結果は、それぞれの自己受容に心のエネルギーの使い分けがなされていないことも考えられ、「生き方」受容以外全ての因果関係を示した女子と比較し、男子の自己受容の単純さを示しているとも推測される。男子は、知性・理性で「考える自己受容」をしていることも予測したが、「大人の自我状態（A）」の関与が認められなかったことにより、女子と同じように、自己の内面性に対する認識は未熟で人間的成熟性は認められないと考えられる。

女子の分析結果で、「自由な子ども（FC）」と自我状態に注目していることについて述べたが、男子でも「自由な子ども（FC）」の自我状態による受け容れは、「忍耐と安定（無理）」受容一つのみである。（FC）による受容がありのままの自己受容の根幹という先に述べた考えにより、男子の自己受容の根幹は、「忍耐と安定（無理）」受容と考えられる。無理を含んだ忍耐と安定を喜び

菱 田 陽 子

のある自然な気持で受け入れながら、この関わりを中心に、全体的なトータルとしてのありのままの自己受容の実現に向かっていると考えられる。

Figure2が示すように、「自由な子ども (FC)」と「忍耐と安定 (無理)」受容のパス係数は .35 と女子に比べ大きく、関与を示した4つのパス係数の中でも2番目に大きい。「忍耐と安定 (無理)」受容因子は、忍耐力、親に対する子どもとしての自分、生き方、経済状態、情緒安定性などのほか、優しさも内容としており、真面目さは含まれていないものの、忍耐は真面目さのある忍耐と考えられる。男女間に多少の違いはあるものの、男女ともに、真面目さ、優しさが (FC) とプラスに関わっていると認められたことにより、先の研究より注目してきて真面目さ、優しさが自己受容の根幹であるとする考えはおおよそ支持されたと思われる。これまで注目してきた、優しさ、真面目さについて、女子の優しさ、真面目さと男子の優しさ・真面目さは、その因子構造が似かよっているとともに、相違も認められる。共通点としては、男女共に、真面目さ・優しさに協調性や責任感のある社会性を含んでいる点である。相違点としては、女子は家族との関わりを意識した優しさ・真面目さであり、男子の優しさ・真面目さには指導力・やる気などの社会性と、忍耐が含まれている点である。優しさ、真面目さの受け止め方は単純ではないことも推測され、優しさ、真面目さの内容を更に吟味したい。

価値判断や理論観など父親的な厳しい自我状態である「批判的な親 (CP)」と「外見」受容、「居場所」受容の関わり方は、共にマイナスの関係を示した。それぞれパス係数は、-.38, -.29である。男子にとって、厳しさは、「外見」受容、「居場所」受容を抑制し、女子の場合、「社会性」受容を抑制していることが窺われる。

家庭などを受容する「居場所」受容は、使っている自我状態の相違はあるものの、男女共にそれぞれの自我状態が家庭などの受容を抑制している。女子は、合理的でよく考えたり、反抗しながらも周囲の期待に沿うことに気を遣うと、家庭、家族を受け容れることができず、男子は厳しく批判する気持では、家庭、家族を受け容れられないことが示唆され、自分の居場所の受容の難しさが窺われる。あるべき姿、理想的な姿を真面目に追うほど現実の自分の居場所を肯定できないとも考えられる。

「順応した子ども (AC)」の自我状態では、「まじめなやさしさ」受容ができないことが示されたが、喜びの無い、反抗を含む複雑な自我状態では、思いやり、忍耐力や指導力などの社会性を内容とする「まじめなやさしさ」受容は難しいことが推測される。パス係数は、-.27 と小さく因果関係は他の要素に比べ、大きくはない。

(3) 女子青年の菱田による自己受容とエゴグラム (自我状態) の因果関係

Figure3 は、女子について菱田自己受容の各因子と自我状態との因果関係モデルを示したものである。 $(\chi^2=10.912$ (df=9, $P=.282$), NFI=.873, RFE=.605, TLI=.898, CFI=.967, 及び RMSEA=.043)。

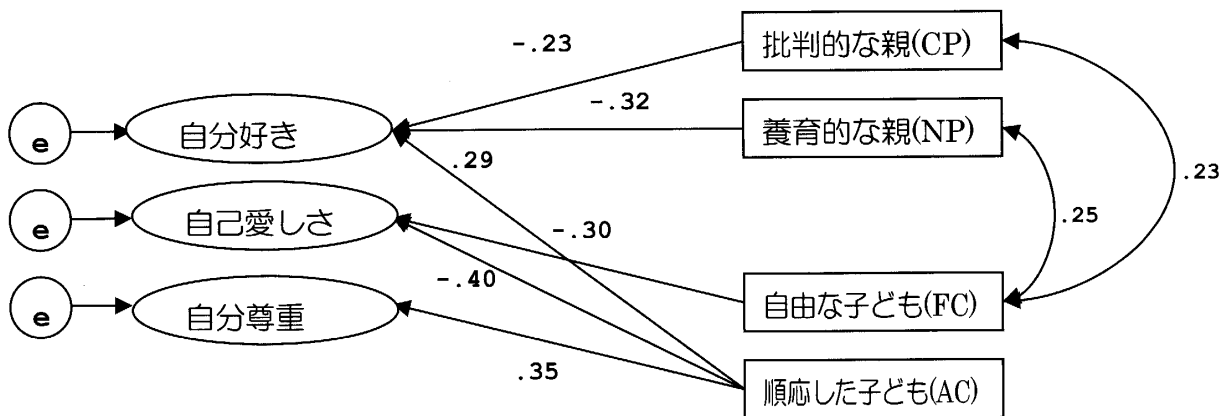


Figure3 菱田自己受容因子とエゴグラムの因果関係 (女子)

男女とも、因子構造は似通った結果となった。菱田尺度は沢崎尺度とは異なり、具体的な自己受容の対象を聞いているのではなく、自己受容の様態を聞いている。沢崎と同じように、3因子と「自由な子ども (FC)」の関わりに注目したが、女子にマイナスの関わりが一つ認められただけで、以下で述べる通り男子には認められず、プラスに関わるものはなかった。菱田尺度の3因子いずれも一般的に肯定的であると受け止められている項目ばかりではなく、弱さ、悩みなどのある自分の受容も聞いている。「弱くて至らない自分であっても、トータルとして愛しく思う受け容れ」、「自分を心身ともにいたわってもいいと思う自己へのいたわり」、及び「自分は生きていいのだと思う自己の生に対する肯定」に関して、「感情や要求を自由に表現でき、喜びに満ち、直感力や創造力が宿っている、自由な子ども (FC)」の自我状態がプラスに関わらなかったことは、それなりに理解できると考えられる。

分析の結果、「自由な子ども (FC)」は「自己愛しさ」とのみマイナスの関わりを示した。「自己愛しさ」には、(FC) の他に (AC) のマイナスの関与が認められたが、この結果は、(AC) や (FC) を使うことは「自己愛しさ」を抑制することを示している。即ち、自我状態「自由な子ども (FC)」、「順応した子ども (AC)」を使っている者は自己を愛しいと思っていない。自由な気持ちで生きている者や自分を抑制して順応している者には、自分に愛しさを感じずきっかけがなかったり、そう感じるゆとりがないのかも知れない。自分を愛しいと思う者は、自分を押さえて順応しようとは思わないのではないかと考えられるが、逆に周囲にあわせる姿勢からは自分を愛しいとは思えないことも考えられる。自己を愛しいと考える力がなければ自己愛しさとはどういうことかわからないとも考えられ、「自由な子ども (FC)」、「順応した子ども (AC)」の自我状態には、考えるメタ的な要素はほとんど含まれていないとも考えられる。「自己愛しさ」は自分に対する優しさ、いたわりを内容としており、人間として未成熟な若者にとって、これら自我状態とマイナスの関与を示したことは、青年期の特徴とも考えられる。自己に対するいたわりは、更なる人生経験により生まれることが推測される。

「自分好き」には「批判的な親 (CP)」,「養育的な親 (NP)」,「順応した子ども (AC)」がそれぞれ、パス係数が、-.23 -.32, .29 で関与を示している。(NP) はそれなりに強い関係を示しており、「思

菱 田 陽 子

いやり、優しさ、いたわり、寛容さがあり、親身になる養育的な親 (NP)」を使って、弱さのある自分を受け入れることも推測されたが、マイナスの関わりであった。女子青年にとって、親の自我状態を使って子どもや病人など他者の弱さの受け容れはできても、自分の弱さを受け容れることは難しいとも考えられる。プラスに関与しているのは、反抗を含んだ未熟な自我である AC であり、「順応した子ども (AC)」については、今後更なる検討が必要と思われる。(AC) は「自己愛しさ」と -.40, 「自分尊重」と .35, 「自分好き」と .29 の関わりを示している。この結果より、反抗、未成熟さを含む「順応した子ども (AC)」を使って「弱くて至らない自分であってもトータルとして自分を愛しく思っている」し、「自分は生きていてもいいと思う生に対する肯定感」ももっているが、「自分を心身共にいたわる」気持はもてないことがわかる。自分に対する甘さもあると考えられる (AC) を使うと弱い自分に、よくやっているという評価を与え、そんな自分は生きていていいという自己尊重感につながり、自分を好きになることはできるが、自分の心身に対するいたわりには、成熟性を必要とし、AC による受け容れは難しいとも考えられる。肯定的な自己の受け容れに (AC) のみが関わっていることは女子青年の自己受容の特徴であることが示唆され、注目したい。弱さを含んだ自分の受け容れは、積極的な受け容れというより、「仕方がないではないか」というような諦めの気持が含まれることも予測され、(AC) の弱々しさには、諦めの要素があるようにも思われる。

自分の弱さを肯定的に受容することに「事実に基づいてものごとを判断しようとする合理的で、感情的に動揺せず、良く考えて行動する大人の自我状態 (A)」が使われることも予測したが、複雑な「自分好き」の受容は、合理的な考えでは受容できないことが推測される。「教えられた自分」と言われる (NP), (CP) の親の自我状態を使うことは「弱さのある自分でも好き」を抑制するとも考えられ、「自分好き」になることは容易ではないことが推測される。

「自分尊重」は、自分の生への肯定感を内容としているが、この因子と関わりを示したのは、順応した子ども (AC) のみであった。パス係数は .35 でそれなりに大きい。(AC) を使っている「自分好き」傾向と同じように、喜んで元気に自分の生を肯定するというより、生まれてきたのだから、それはそれで仕方がない、というような弱々しさが含まれていることも予測される。自分の生への肯定に関するこの特徴は、アイデンティティの揺れが大きい青年期の特徴とも考えられる。

いずれの因子にも、「大人の自我状態 (A)」の関わりは認められなかった。弱さを含む自分、自己へのいたわり、自己の生への肯定感いずれも、合理的な (A) の関与は認められなかったことは、青年期のメタの未発達によるものとも推測されるが、今後更なる検証が必要と考えられる。

(4) 男子青年の菱田による自己受容とエゴグラム (自我状態) の因果関係

Figure4 は、男子について菱田自己受容の各因子と自我状態との因果関係モデルを示したものである ($\chi^2=2.318$ (df=2, $P=.314$), NFI=.935, RFE=.514, TLI=.885, CFI=.985 及び RMSEA=.051)。

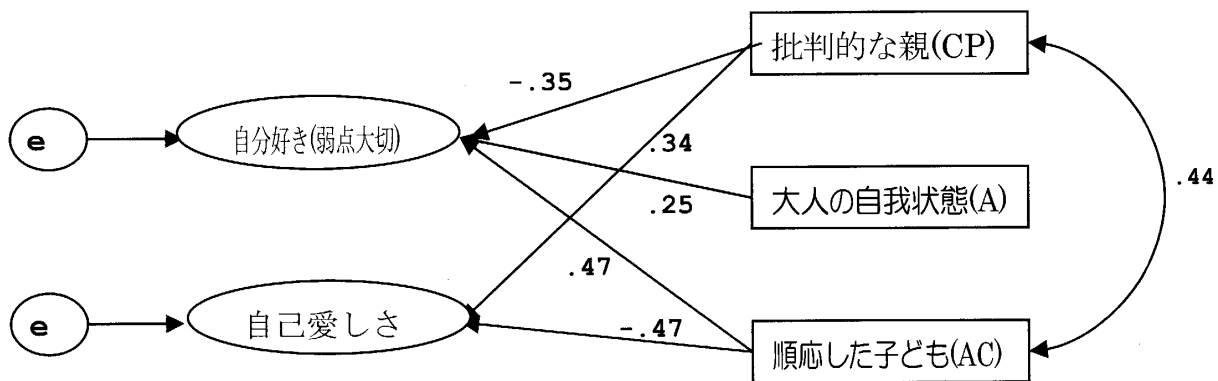


Figure4 菱田自己受容因子とエゴグラムの因果関係 (男子)

男子は、沢崎による自己受容と同じように女子に比べ、自我状態と自己受容の関わりは少ない。自己の生への肯定を内容とする「自己尊重」因子と自我状態の関わりは認められず、自我状態では、「養育的な親 (NP)」, 「自由な子ども (FC)」と自己受容の関わりは認められなかった。

「自分好き」に「順応した子ども (AC)」, 「批判的な親 (CP)」, 「大人の自我状態 (A)」がそれぞれパス係数 .47, -.35, .25 の関わりを示しており, 「大人の自我状態 (A)」が関わり, 「養育的な親 (NP)」が関与しない点で, 女子の「自分好き」と違いが認められる。弱点を含む「自分好き」にメタの関わりを示しており, 男子は考えて自分の弱さを受容しているようである。

「自分好き」と「自己愛しさ」双方に, 「批判的な親 (CP)」, 「順応した子ども (AC)」が関与しているが, プラス・マイナスの関与が反対の様相を示している。批判的で厳しい気持では, 弱い自分を受け入れることはできないが, 自分をいたわり, 自分への優しさで受け入れることができることを示している。反対に, 反抗心があっても周囲の期待に沿うように, 消極的に気を使いながら, 自分の弱さもそれでいいと思っているが, 周囲に気を使いながらでは, 自分をいたわることはできないことが示された。女子の「自己愛しさ」に親の自我状態の関わりは認められなかったが, 男子は, 「批判的な親 (CP)」が関与し, 自分をいたわり, 自分に優しくすべきである, と考えているようである。自分のいたわりには「大人の自我状態 (A)」の関与は認められないので, 客観的に, メタ的に考えているのではなく, 父親的な, こうすべきであるという規範的な気持が, 自分のいたわりに対して働いていることが推測される。

弱い自分の受け入れに, メタ的な「大人の自我状態 (A)」をつかっていることが男子の特徴であり, 男子は, 反抗を含み複雑な弱さのある「順応した子ども (AC)」を使いながらも, 考えながら, 弱い自分を受け入れている傾向があることが推測される。女子は, 「自分好き」に「順応した子ども (AC)」のみをプラスに使っている点が男子とは異なる。

女子は「自己愛しさ」に「自由な子ども (FC)」の関与を示したが, 男子では認められず, 男子は「批判的な親 (CP)」の関与を示したが, 女子では認められなかった。女子は, 自由気ままな気持では自分をいたわることはできず, 男子は, 自分に厳しくては自分をいたわることができない。男女とも周囲の期待に応えようと気を使っている気持では, 自分をいたわることができない。

菱 田 陽 子

男子は、自分をいたわるべきだと思っているが、女子はどんな気持で自分をいたわっているのかは不明である。

菱田による自己受容と自我状態について、女子はマイナスの関わり方がプラスの関わり方の2倍あり、男子はプラスの関わり方が多いことが認められた。これは、女子のほうが複雑な受容傾向を示しているとも解釈できるが、マイナスの関わりが多いということは、男子と比較して消極的な自己受容をしていることも推測された。あるいは、女子の方が、ここで調べた内容に関しては、男子より自己受容に困難を感じていることも推測され、今後の課題である。

全体的考察

本研究の分析の結果、自己受容と自我状態の因果関係が明らかになるとともに、男女の因果関係にかなり違いのあることも認められた。

自分に関する様々な項目が気になるか気にならないかで、自己受容しているか、いないかをみた沢崎尺度と自我状態の因果関係でも、自己受容傾向の程度をみた菱田尺度と自我状態の因果関係でも、男子に比較して女子の方が遙かに多くの関わりが認められた。この結果により女子は男子より複雑な自己受容形態であることが窺える。又、いずれもマイナスの関わりを示すものが圧倒的に多く、青年にとって、自己受容が容易ではないことを示している。人間的に未成熟な青年期に不安定な自分の心をかかえながら、不適応を起こしやすい状態にあるとも考えられる。この点において、健康な成人男女の自己受容とは、かなり違いがあることも予想され、今後の課題である。

先の研究(金子・菱田 2005)で明らかとなった、女子青年の真面目さ・優しさ受容を喜びのある気持で実現し、その気持が自己受容を支えているであろうとした結果が、本分析で、性差はあるものの、おおよそ男子青年でも認められ、青年の自己受容の特徴と考えたことが支持されたと言える。

女子は、「喜びに満ちた気持(FC)」で受け容れている、自分の優しさ、真面目さを自己受容の根幹としていることが特徴と考えられ、「反抗心を含みながらも周囲に気を使う複雑な気持ち(AC)」で自分の安定性や外見を受容していることが明かとなった。更に、この複雑な気持ち(AC)で、自分の弱さもそれでいいとし、生きていることを肯定していることも認められた。

男子は、「喜びに満ちた気持(FC)」で受け容れている、自分に対する優しさのある忍耐と安定性を自己受容の根幹としていることが特徴と考えられ、「反抗心を含みながらも周囲に気を使う複雑な気持ち(AC)」で、自分の弱さもそれでいいとし、「厳しさのある批判的な気持(CP)」で自分をいたわるべきであると思っていることが明かとなった。

(FC)によるまじめさ・優しさ、忍耐の受容が青年の自己受容の根幹になり、自己受容を支えていると考えてきたが、この関係がマイナスの個人は適応に関わる自己受容をなしてはいないとも考えられる。自己愛的自己受容であったり、自己欺瞞的自己受容であったり、自己肯定感の強い自己受容になるとも考えられ、適応に問題が起こることも予測されることから、今後の検討課題であると考えている。

先の研究では、(FC)を使った受容を中心に分析したが、今回の分析により、自我状態(AC)

のプラスの関わりが多く認められ、男女共青年は、自己受容に (AC) を多く使っていることが明かとなった。この結果より、反抗心を含みながら周囲の期待に応えようとする従順性を特徴とする (AC) の自我状態にも注目する必要があると考えている。(AC) の使い方が青年の特徴とも考えられ、今後の課題としたい。

自己受容に、真面目な姿勢、自己に対するいたわり、優しさ、忍耐の関与がみられたことは、これから様々な人生経験が予想される青年期の心理を研究してきて、希望を見いだしている。真面目さ・優しさ・忍耐を、「親の影響を受けていない本来の自分らしい喜びのある気持 (FC)」で受け入れている青年の心の傾向は、真面目さ・優しさ・忍耐のいずれもが、未成熟な心が未成熟なりに成熟に向かい、安定した自己受容に向かう基本的な力を生み出す心性と考えられることから、青年の心は安定した自己受容に向かう力を備えていることを示していると思われる。

男女差もまた、男として、女として、生きていくことに必要な性差であろうと思われる。沢崎尺度と自我状態の因果関係で、女子の方が複雑な関わり方を示したことは、社会でも家庭でも従属する環境におかれることも多いと予想される女子に必要な柔軟性を示しているとも考えられる。

「大人の自我状態 (A)」がプラスの関わりを示したのは、男子の菱田尺度と自我状態の因果関係で、自分の弱点も大切と考え、受け入れている点のみであり、自己受容に冷静で客観的なメタの関わりが少ないことが明かとなった。ありのままの自己の受け容れは、客観的判断では実現しないことを理解しておくことは、不適応の援助に重要であると考えられる。客観的理由付けでは、喜びのある納得した自己受容に結びつかないと思われる。

今回の分析では男子の数が少なく、分析結果の妥当性に問題が残る。今後、調査を繰り返し、ここでの結果を確認したい。

要 約

金子・菱田 (2005) では、女子青年の自己受容について、友だちつき合いを中心に検討した。その内容には、自己受容と自我状態についての検討も含まれており、「自由な子ども (FC)」とプラスに関わる自己受容の要素が自己受容の根幹であると考え、(FC) に注目してきた。その結果、「自由な子ども (FC)」の自我状態を使った「やさしさ・まじめさ」受容 (沢崎) が、女子青年の自己受容の根幹であることが示唆された。本研究では、この結果を受けて、男子の自己受容と自我状態の因果関係についても分析し、性差の検討も試みた。

先の女子の研究 (金子・菱田 2005) では、国立大学生を対象として、相関によって分析したが、本研究では、男性及び女性について、共に共分散構造分析によって、自己受容と自我状態の関わり方を分析・検討した。自己受容尺度として、①沢崎 (1993)、②菱田 (2003) の一部を変更したもの、自我状態尺度として、③エゴグラム (杉田 1990) を用いた。分析・検討の結果、以下のようなことが明かとなった。

自己受容と自我状態の関わり方について、いくつかの男女差が認められた。

沢崎による自己受容と自我状態の関係では、まず、男子に比べ、女子の方が関わり方は多く、複雑な自己受容の様相をしていることが推測された。

二つ目として、女子は親の影響を受けていない、「生まれながらの自分らしい気持 (FC)」で、

菱 田 陽 子

自分の真面目さ・優しさを受容しており、このことから、真面目さ・優しさを受容していることが女子の自己受容全体を支える根幹であることが、今回の分析でも確認された。これに対して、男子は(FC)で、優しさを含む忍耐と安定を受容していることから、優しさのある忍耐と安定を受容していることが男子の自己受容全体を支える根幹であることが示唆された。

菱田による自己受容と自我状態の関係では、(FC)とプラスの関わりは認められなかった。菱田尺度の因子は、自分の弱さの受容、自分の心身へのいたわり、悩んでいる自分、等、「感情や要求を自由に表現でき、喜びに満ち、直感力や創造力が宿っている、自由な子ども(FC)」では受け入れにくいと思われる自己受容についての内容も含んでおり、(FC)とプラスに関わる傾向に注目するのではなく、それぞれの関わり方を検討した。

菱田尺度と自我状態の関係においても、まず、男子に比べ、女子の方が関わり方が多く、女子の自己受容の複雑性が推測された。具体的には、女子は3つの自己受容傾向全てと、(A)を除いた残り全ての自我状態との間に何らかの関わりが認められた。男子は、女子には認められなかった「大人の自我状態(A)」と「弱さを含む自分が好き」がプラスに関わり、考えながら自分の弱さもそれでいいと思っていることが窺えた。

三つ目として、女子は「反抗を含んだ複雑な気遣いのある気持(AC)」で「弱さを含む自分を好き」だと思い、「自分の生に対する肯定感」をもって、生きていることに感謝していることが示された。男子は、「こうあるべきだと考える厳しさ・規範的な気持(CP)」と、「反抗を含んだ複雑性のある気持(AC)」が、「自分好き」と「自己愛しさ」に対して、反対の関わり方を示した。言い換えれば、男子は、(CP)を使って、自分をいたわるべきだとは思えるが、(CP)を使うと弱点のある自分を受け入れることはできず、(AC)を使って弱点のある自分もそれでいいと思えるが、(AC)を使うと自分をいたわることができないことが示唆された。

四つ目として、女子はマイナスの関わり方がプラスの関わり方の2倍あり、男子はプラスの関わり方が多かった。これにより、女子のほうが複雑な自己受容傾向を示しているとも解釈できるが、マイナスの関わりが多いことから、消極的な自己受容をしているとも考えられ、自己受容に困難を感じていることも推測された。

最後に、先の研究(金子・菱田2005)では、自我状態(FC)の自己受容に対する関与に注目してきたが、本研究の分析・検討の結果、特に女子の自己受容に自我状態(AC)がプラスに関わっている点に特徴が認められ、(FC)の関わり方のみではなく、(AC)の関わり方にも注目しつつ、更なる調査と分析の必要性が今後の課題として残された。

文 献

- 菱田陽子 2003 現代青年の自己受容に関する分析, 北陸学院短期大学紀要, **34**, 179 - 196.
- 菱田陽子 2004 現代青年の自己受容に関する分析 (2): やさしさを中心とした性差の検討, 北陸学院短期大学紀要, **35**, 195 - 212.
- 菱田陽子 2005 現代青年の自己受容に関する分析的研究 (5): 自我状態との関係を中心とした男女比較, 日本教育心理学会第 47 回総会発表論文集, 126.
- 金子勲榮 2003 現代青年の意識構造の分析: 友人関係と将来展望を中心に, 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編), **52**, 63-80.
- 金子勲榮 2004 現代青年の意識構造の分析 (2): 充実感・将来展望等の特徴, 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編), **53**, 207-218.
- 金子勲榮・菱田陽子 2005 女子青年の自己受容に関する分析: 友だちつき合いを中心とした多角的分析, 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編), **54**, 71-88.
- 狩野 裕・三浦麻子 2003 AMOS, EQS, CALIS によるグラフィカル多変量解析: 目で見る共分散構造分析 現代数学社.
- 小塩真司 2004 SPSS と Amos による心理・調査データ解析 東京図書株式会社.
- 沢崎達夫 1993 自己受容に関する研究 (1) 新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, **26**, 29-37.
- Stewart, Ian & Joines, Vann 1987 TA TODAY 深沢道子 監訳 1991 TA TODAY 実務教育出版.
- 末松弘行・和田廸子・野村忍・俵里英子 1989 エゴグラム・パターン: TEG 東大式エゴグラムによる性格分析, 金子書房.
- 杉田峰康 1990 交流分析のすすめ, 日本文化科学社.
- 田部井明美 2003 SPSS 完全活用法: 共分散構造分析 (Amos) によるアンケート処理, 東京図書株式会社.
- 涌井良幸・涌井貞美 2003 図解でわかる共分散構造分析 日本実業出版社.
- 山本嘉一郎・小野寺孝義 編著 2002 Amos による共分散構造分析と解析事例 第2版 ナカニシヤ出版.